

献呈の辞

渡辺達徳教授は、2021年3月31日をもって、本学を定年退職されることとなった。

教授は、1979年中央大学法学部を卒業後、一旦、民間企業にお勤めになられたが、1985年に中央大学大学院法学研究科博士課程前期課程（民事法専攻）に進学され、1987年に同研究科博士課程後期課程（民事法専攻）に進まれた。その後、1990年に小樽商科大学専任講師に採用され、1991年に同大学助教授とされたが、1996年に母校である中央大学法学部に助教授として戻られ、1999年に教授に昇任された後、同大学大学院法務研究科（法科大学院）教授を経て、2009年4月に本学に着任された。爾来、教授は、12年間にわたって、本学において、民法を中心に、研究・教育に携わってこられた。

教授は、本学着任後、学界をリードする数多くの論稿を公刊され、わが国の民法の議論の発展に大きく寄与されるとともに、司法試験考査委員、経済産業省産業構造審議会関連の複数の委員会の委員、宮城県労働委員会公益委員など、多くの公職を務められることにより、多大な社会貢献をされた。

また、教授は、その穏やかで柔和な人柄から、多くの同僚や学生から信頼と敬慕の念を集めてこられた。教授は、着任から3年目に当たる2011年4月に教育研究評議会評議員に就かれ、同職を2013年3月まで務められた後、引き続き、2013年4月から2015年3月まで研究科長として法学研究科を牽引されたが、これも教授が、着任後、僅かな期間で多くの同僚から深い信頼を得ていたことを物語るものである。研究科長に就任された教授は、様々な場面でリーダーシップを発揮された。法科大学院における教育活動と高度な理論研究の双方を遂行できる人材を育成することを目的として本研究科

に設けられていた後継者養成コースを，後継者養成コース（研究者型）と後継者養成コース（実務家型）に再編し，同コースの拡充を遂げられたのは，その一例である。

このたび私たちは，教授への心からの感謝と惜別の思いを込めて，退職を記念する特集号を編み，教授に献呈することとした。教授におかれては，これからもますますご健勝にて，末永く本会を見守って下さるよう，切にお願い申し上げます。

2020 年 12 月東北大学法学会会長

成瀬 幸典